

ジョナサン・エドワーズにおける国家契約 (National Covenant) ーアメリカ的慨嘆歌 (Jeremiad) という神学的社会倫理基盤ー

The National Covenant in the Theology of Jonathan Edwards ー American Jeremiad as Covenantal Foundation of Social Ethics ー

矢 澤 励 太

要旨

アメリカ的慨嘆歌の伝統は、具体的に適用されるレトリックについては現代において注意が必要であるとしても、契約の民が共同体の歩みを自己吟味する中で生まれてきた神学的伝統であり、アメリカのキリスト教を理解する上で考慮すべき重要な要素の一つである。しかしこの慨嘆歌の論理は、契約神学の地下水脈がなお息づいているアメリカ社会と初めからこの共通基盤を持たない多元的社会である日本とでは背景が異なるのであり、日本における慨嘆歌とそれに基づく公共神学的言説は社会や国家ではなく、教会という共同体においてこそ継承されねばならない。

キーワード：慨嘆歌 (jeremiad)／ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards)／
国家契約 (national covenant)

I はじめに

1.1 問題状況

2001年9月11日にアメリカで同時多発テロが起こった時、パット・ロバートソン (Pat Robertson)、ジェリー・ファルウェル (Jerry Falwell) といった著名人が、この出来事を神のアメリカに対する懲罰だと語り、物議を醸した。¹ 2017年2月にも、上院議員候補のロイ・モア (Roy Moore) が、「9.11」はアメリカが神から離れていることに対する神罰であったかもしれないと発言し、話題となった。² そればかりではない。2004年にインドネシア大津波、2005年のハリケーン・カトリナ、2010のハイチ大地震、2011年の東日本大震災といった大規模自然災害が起こるたびに、これは何らかの神罰ではないか、といった言説が識者や著名人の中から飛び出して物議を醸すことがある。

これは全能なる神の世界創造と統治および摂理を信じる者にとっては、「なぜこのようなことが

起こるのか」という問いと結びついて惹起する一つの説明の試みではある。しかしことアメリカにおけるこうした神罰論的言説の背景には「アメリカ的慨嘆歌」(American Jeremiad) と呼ばれる伝統があることを認識する必要がある。アメリカはピューリタンたちがニューイングランドに入植した当初から、聖書が証しする神によって特別に選出され、契約を結んだ民としての明確な意識をもって出発した。この神との契約関係において自分たちがどのような状態にあるのかを常に振り返り、吟味する精神的態度が「慨嘆歌」という霊的修辞を生み出してきたのである。このピューリタンの自己吟味の伝統を理解することが、今日にまで至るアメリカの政治的、社会的、宗教的背景を探る上で不可欠である。

さらにはこの「慨嘆歌」がどのような意義を持ち、どのような問題点を孕むものであるかを検討し、日本社会と教会にとっての意味を考察した研究はほとんど見られない。日本ではわずかに米文学者難波雅紀がトーマス・シェパード (Thomas Shepherd) の説教に現れた慨嘆歌を研究し (難波、

YAZAWA, Reita
北陸学院高等学校
聖書科

1995年)、国際政治学の観点から中嶋啓雄が現代アメリカ政治の背景にあるユダヤ・キリスト教的伝統に着目している(中嶋、2012年)。しかし日本のキリスト教が受け継いでいるアメリカのキリスト教の精神的遺産としてのこの慨嘆歌の伝統は、本来日本の教会が内側から理解し、吟味検討し、建設的批判と共に継承していくべきものである。本稿では聖書的伝統から生まれ、ヨーロッパからアメリカに伝播した後、そこで独自の展開を遂げることになるこの「慨嘆歌」の伝統を考察し、その功罪についても認識した上で、日本の教会と社会におけるその意味についても触れてみたい。

1.2 これまでの研究

アメリカにおける慨嘆歌の伝統は、戦後アメリカにおけるピューリタン再発見のきっかけとなったペリー・ミラーの研究によって認識され始める(Miller、1953年)。しかし特にこの分野における研究の金字塔として知られるのはサクバン・バーコヴィッチ(Sacvan Bercovitch)による『アメリカ的慨嘆歌』である。バーコヴィッチは、17世紀アメリカ・ピューリタニズムに淵源するアメリカ的慨嘆歌の伝統とその特徴を特定した(Bercovitch、1978)。ハリー・スタウト(Harry S. Stout)はニューイングランド植民時代に生み出された膨大な説教の分析を通じて、選挙や断食祈祷日等におけるピューリタンの国家契約理解を描き出している(Stout、1986)。ロバート・ベラー(Robert N. Bellah)はアメリカ社会における市民宗教化したキリスト教の伝統、さらにその深みにある契約概念の意味を考察している(Bellah、1975)。さらにアンドリュー・マーフィー(Andrew Murphy)はバーコヴィッチの研究がカバーする南北戦争時代までを越え、21世紀アメリカにまでいたるこの慨嘆歌の系譜をたどっている(Murphy、2009)。特に世界のグローバル化に歯止めがかかり始め、トランプ大統領のような人物が「偉大なアメリカを取り戻す」と力説し、各国が自国の利益を最優先にする兆しが見える中で、アメリカが自己のアイデンティティーについて再考し始めており、その中でこの「アメリカ的慨嘆歌」の伝統が再び関心を集めていると思われる。

本研究が中心的に考察する18世紀アメリカの牧

師・神学者であるジョナサン・エドワーズ(Jonathan Edwards)もまた、ニューイングランドに入植した初代ピューリタンたちからのアメリカ的慨嘆歌の伝統を受け継いで説教をしていることが、スタウトによって明らかにされている(Stout、1988)。ジェラルド・マクダーモット(Gerald McDermott)もまた、エドワーズの国家契約について、パブリック・セオロジー(public theology)の観点から関心を示している(McDermott、1992)。これらの歴史的研究に基づきつつ、本稿ではアメリカ的慨嘆歌を組織神学的にも検討し、日本の教会との関連で考察を加えたい。

1.3 本研究の主張

本研究において私は、アメリカ的慨嘆歌の伝統は、具体的に適用されるレトリックについては現代において注意が必要であるとしても、契約の民が共同体の歩みを自己吟味する中で生まれてきた神学的伝統であり、アメリカのキリスト教を理解する上で考慮すべき重要な要素の一つであることを主張したい。しかしこの慨嘆歌の論理は、契約神学の地下水脈がなお息づいているアメリカ社会と初めからこの共通基盤を持たない多元的社会である日本とでは背景が異なるのであり、日本における慨嘆歌とそれに基づく公共神学的言説は社会や国家ではなく、教会という共同体においてこそ継承されねばならないことにも触れる。

1.4 本論文の構成

以上の主張を論証するため、まず初めにアメリカ的慨嘆歌とは何であるのかを考察したい。次にその特質がアメリカ最大の神学者とも呼ばれるジョナサン・エドワーズの神学においても端的に表出されていることを確認したい。その上で、この慨嘆歌の意義と、それが孕む危険性について考察を加えたい。最後に、なお慨嘆歌が持つ教会論的重要性を確認し、契約論的基盤を共有しない日本社会においては、教会こそが慨嘆歌の発信共同体となるべきであり、教会こそが慨嘆歌の伝統の本来の担い手であることを主張したい。

Ⅱ アメリカ的慨嘆歌 (jeremiad) とは何か？

本稿において「慨嘆歌」(jeremiad)と訳出している用語は、「エレミヤの嘆き」とも訳されるように、旧約聖書の時代、紀元前7世紀から6世紀にかけて活動した預言者エレミヤに遡る嘆きの歌である。一方でエレミヤは、イスラエルの民の心が主なる神から離れ去ったことを嘆き、神の怒りと呪いを語った。

「彼らは他の神々に従って歩み、それに仕え、ひれ伏し、わたしを捨て、わたしの律法を守らなかった。お前たちは先祖よりも、更に重い悪を行った。おのおのそのかたくなで悪い心に従って歩み、わたしに聞き従わなかった。わたしは、お前たちをこの地から、お前たちの先祖も知らなかった地へ追放する。お前たちは、そのところで昼も夜も他の神々に仕えるがよい。もはやわたしは、お前たちに恩恵を施さない。」
(エレミヤ16：11－13)

他方でエレミヤは、なお神がご自分から民と結ばれた契約に信実であられ、神の民イスラエルに救いと祝福をもたらすという主の約束を告げ知らせる。

「見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は我らの救い』と呼ばれるであろう。」
(エレミヤ33：14－16)

このように、エレミヤが預言するのは神の民イスラエルが神との契約に信実に歩むならば祝福を、契約を軽んじ、その心が神から離れるならば災いと呪いが神からもたらされるという約束と警告である。

「あるとき、わたしは一つの民や王国を断罪して、抜き、壊し、滅ぼすが、もし、断罪したその民が、悪を悔いるならば、わたしはその民に災いをくだ

そうとしたことを思いとどまる。

またあるときは、一つの民や王国を建て、また植えると約束するが、わたしの目に悪とされることを行い、わたしの声に聞き従わないなら、彼らに幸いを与えようとしたことを思い直す。」
(エレミヤ18：7－9)

「エレミヤの嘆き」としての慨嘆歌はこうして、神の民であるイスラエル共同体が、神との契約関係において現在どのような状態にあるかを省み、神の言葉に照らして自己吟味をし、繰り返し悔い改め、神に立ち帰るための象徴的修辭となった。

したがってこの「慨嘆歌」は元来聖書の起源を持つものであるが、17世紀にピューリタンがアメリカに渡っていく中で、独特な展開を見せることになる。それが「アメリカ的慨嘆歌」と呼ばれるようになるものである (Miller, 1953年, 27－39頁)。サクバン・バーコヴィッチによれば、アメリカ的慨嘆歌とは、「民が神との契約関係において現在どのような状態にあるのかを説き明かすもので、あらゆる公的な機会 (断食の日、祈りの日、恥辱の日、感謝の日、契約更新の時、戦争の時、そして最も丁寧にかつ厳粛に行われたのは選挙の日の集いにおいて) に行われたもの」である (Bercovitch, 1978, No.779/6137)。

すでに1629年にジョン・ウィンスロップ (John Winthrop) がマサチューセッツ湾岸植民地上陸にあたりアルベラ (Arbella) 号において行った説教「キリスト教徒の慈愛のひな型」において、次のように語られている。

「かくて神とわれわれのあいだには、目的が存在する。われわれは、この事業のために神との契約に入ったのである。われわれは神の委任を受け入れ、神はわれわれに規約をつくることを委ねられた。わたしたちは、これらの目的を達成するために、実行にうつることを宣言したのだ。神がわれわれをよみ宣言したのだ。神がわれわれをよみし、祝福し給わんことを。神がこの願いを聞きとどけ、わたしたちが求めている処に平安のうちに導き給うなら、神はこの契約を批准し、わたしたちの任務に封印をなし給うたのである。そして神はその中に記されている規約が厳密に実行されるよう期

待しておられる。しかし、もしわたしたちが目的として提示した規約を遵守せず、神を偽ってこの世に心を寄せ、肉の思いを追い、自分自身と子孫のために大いなるものを求めるなら、主は必ずや、わたしたちに対して怒りを発し、偽りの誓いをたてた者に報復し、契約不履行の代価を思い知らせ給うであろう。」

(木下、1976、124頁)

ここにアメリカ的慨嘆歌の特徴は顕在化している。「丘の上の町」(city upon a hill)としてニューイングランドが神の栄光を現すために心をつにし、その歩みにおいて神との間に交わした契約への誠実を尽くすならば、民は「イスラエルの神がわたしたちのあいだにい給う」ことを見出し、「主はわたしたちの行く手をたえず祝福し給う」。しかし「わたしたちがたずさわっているこの事業において神を偽」ることがあるならば、「主が現在さしのべておられる援助の手を引いてしまわれる」こととなり、「わたしたちの噂は知れわたり、この世の物笑いの種」となる(木下、1976、125頁)。³

そしてこの説教は申命記第30章にある、奴隷の地エジプトを脱出した後、荒れ野にあってイスラエルの民を導いたモーセの言葉をもって閉じられるのである。

「見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。わたしが今日命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟と法を守るならば、あなたは命を得、かつ増える。あなたの神、主は、あなたが入って行って得る土地で、あなたを祝福される。もしあなたが心変わりして聞き従わず、惑わされて他の神々にひれ伏し仕えるならば、わたしは今日、あなたたちに宣言する。あなたたちは必ず滅びる。」(申命記第30：15-18)

ニューイングランドに植民したピューリタンはその初めから、祝福と災いを神との契約関係においてとらえる精神的態度をもって新天地での神の都建設という事業に乗り出したのである。

初代ピューリタンは自分たちを旧約聖書におけるイスラエルの民と同じく、神に選ばれた民と同

定し、それゆえにイスラエルの民がそうであったように、神との間に契約関係を生きようとした。ピューリタンがイギリスでの迫害を逃れて海を渡り、ニューイングランドに入植した時、彼らはその経験をイスラエルの民の出エジプトの出来事になぞらえたのである。

「旧約聖書全体は、新約聖書への道備えである。受肉以後の歴史のすべてはキリストの再臨への道備えである。それは約束から成就へ、モーセから洗礼者ヨハネ、さらにはサミュエル・ダンフォースに至るものであり、旧世界から新世界へ、カナンのイスラエルからアメリカにおける新しいイスラエルへ、アダムからキリスト、さらには黙示録の再臨へと至るものである」

(Bercovitch, 1978, No. 938-41/6137)。

ピューリタンにおいてこの慨嘆歌の伝統はジョナサン・ミッチェル (Jonathan Mitchell) の『城壁に立つネヘミヤ』(*Nehemiah on the Wall*, 1667)、ウィリアム・スタウトン (William Stoughton) の『ニューイングランドの真の関心』(1668)、サミュエル・ダンフォース (Samuel Danforth) の『ニューイングランドに託されし荒野への使命』(*A Brief Recognition of New England's Errand into the Wilderness*, 1670) といった著作において反芻され、再確認され、ニューイングランドに移住したピューリタンたちの中に浸透していったものと思われる。⁴

その後もこのアメリカ的慨嘆歌の伝統は繰り返しアメリカ史の中に表出されてきた。19世紀の南北戦争や20世紀の公民権運動においても、神のまなざしの下にアメリカ社会の現状を嘆き、神の民として出発したアメリカ社会が国家契約における自己理解の下、本来的理想に立ち帰り、悔い改めて軌道修正をするべしとの訴えとなって現れた。ワシントン行進におけるキング牧師の演説「私には夢がある」も、この系譜に連なるものと読むことができる。さらには1970年代頃から台頭してくるキリスト教右派(ネオコン)と呼ばれる勢力も、価値相対主義とキリスト教理念の薄弱化に揺れるアメリカ社会の現状に憂慮を示し、古きよきアメリカを取り戻そうとして政治に影響を及ぼし始め

た動きとして見るならば、このアメリカ的慨嘆歌の伝統との連関を見出すこともできるのである。

このアメリカ的慨嘆歌の伝統は初代のピューリタンから次世代のピューリタンたちに引き継がれる。しかしそこにおいてすでにこの国家契約の実践は危機と困難を経験し、その内実を巡る葛藤を生じることとなる。18世紀に生きたアメリカ最大の神学者と言われるジョナサン・エドワーズにおいて、このアメリカ的慨嘆歌の伝統とそれを巡る葛藤がどのように具体的に現れ出ているかを以下に概観したい。

Ⅲ ジョナサン・エドワーズにおける慨嘆歌

初期ピューリタンにおいて、この慨嘆歌の特徴が顕著に現れ出たのは、断食、軍事的勝利や敗北、選挙といった出来事を巡る牧師の説教である。ペリー・ミラー (Miller, 1981, 76) やコンラッド・チェリー (Conrad Cherry) といったエドワーズの研究者たちは、エドワーズが初期ピューリタンたちの契約神学の伝統から離脱したと分析しているが (Cherry, 1965, 329)、実際はハリー・スタウトが論じるように、エドワーズは初期ピューリタンの伝統を忠実に受け継いだ典型的な契約神学者であった。⁵ こうした見解の相違が生じたのは、研究者たちが主として当たったエドワーズの原典は彼が日曜日に行った教会での礼拝説教であったのに対し、国家契約のモチーフが典型的に現れ出るのは前述のような断食祈祷日や選挙日といった機会に行われた週日における礼拝説教であり、その多くが未出版であったことによる。現存するエドワーズの説教原稿をほぼすべて閲覧できるようになった現在、エドワーズの説教を分析すれば、そこに国家契約に基づくアメリカ的慨嘆歌の伝統が息づいていることは明らかである (Stout, 1988, 143-144)。

たとえば、1737年3月に行われた断食祈祷日の週日礼拝において、歴代誌下第23章16節 (「エホヤダは自分とすべての民と王との間に、彼らは皆、主の民となるとの契約を結んだ」) を聖書テキストとして、エドワーズは以下のように語っている。

「ある人々は契約の民として神によって選び出されている。本日の聖書箇所では語られている民もま

た然りである。神はアブラハム、イサク、ヤコブとの契約関係に入った。神はその民をエジプトから導き出し、荒れ野において厳粛なる仕方での民と契約関係に入り、神に属する契約の民、特異なる民として地上の諸国から取り分けられたのである。」

(Edwards, 1737, 52 : L. 3r.)

その上でエドワーズはノーザンプトンの会衆に告げるのである。「あなたがたが長きにわたり契約の民として神によって選び分かれた民なのだ。」 (Edwards, 1737, 52 : L. 24r.)

主なる神との契約関係に入った神の民は、この契約関係を誠実に生きることを求められる。もし民が神との契約に背き、神から離れ、民族や国家の私利私欲に走るならば、神の迫りくる裁きを逃れることはできない。もう一つの断食日に行われた説教でエドワーズはこう述べている。「契約の民がまことの神から背き離れる時、彼らは以前にも増して偶像を追い求めることになる」、「人々が神の事柄について無関心になり、冷めた心を持つようになる時、神に仕えることに熱心でなくなる時、人々が主から背き去っていることになる」 (Edwards, 1738, 19 : 753.)。

エドワーズはその説教活動により停滞していたニューイングランドの信仰を呼び覚まし、人々が悔い改めて神に立ち帰り、教会生活に再び熱心になるきっかけとなった信仰覚醒運動の指導者であった。ところが覚醒した信仰は同じ熱心さで長く続くことが難しい。次第に霊的な緩慢や怠慢が生じることは避けられない。牧会者エドワーズは、断食をして悔い改め、神に立ち帰ることを覚える日に、会衆に対して神との契約を思い起こし、契約の民としてのアイデンティティーを回復し、その自己理解にふさわしい生活を改めて求めたのである。

エレミヤ書第2章5節 (「あなたがたの先祖は、わたしになんの悪い事があるのを見て、わたしから遠ざかり、むなしいものに従って、むなしくなったのか」) に基づく説教の際には、エドワーズは神との契約関係に入った神の民が、その後霊的無関心 (spiritual indifference) や独善 (self-complacency) に陥るならば、それは神に対する

深刻な罪と自己卑下をもたらすことになる」と警告している。

「それゆえに我々が元の不信心に逆戻りするならば、それは神に対するより深刻な罪であり、そればかりでなく我々自身に対する大変な卑下なのである。神に対する不敬により、我々は自分自身を貶め、恥辱にさらしていることになるのである。」(Edwards, 1738, 19:767)

神によって選り分かれた聖なる民が、神との契約を蔑ろにし、自己卑下と霊的怠慢に後退するならば、それが招来する神の怒りと審きは深刻なものとならざるを得ない。

こうした神の民としての契約理解は、自然災害の受け止め方にも影響を及ぼす。⁶ たとえば1727年10月にニューイングランドを大きな地震が襲った時に、マサチューセッツの知事は断食と悔い改めと集会を12月に呼びかけ、エドワーズはこの地震が神の契約の民に対する怒り、特に若い世代の生活の乱れに対する怒りのしるしとして説いている(Marsden, 2003, 121-22)。「この地震は神の怒りのしるしとして送られたものであり、神はこの地における邪悪さ一般のみならず、ことに安息日の夜に行われている罪に対して怒りを発しておられるのである」(Edwards, 1727, 227-28)。

また1736年7月にノーザンプトン地域を干ばつが襲い、長い間雨が降らなかった時、雨を乞う祈りの集会において、エドワーズはこの機会を、神の民が自己の魂の状態を省み、契約関係に生きる信仰の姿勢を立て直す時として呼びかけを行っている。

「神が降雨を差し押さえられる時、それは私たちが自らの魂の状態を省み、(神との契約関係を妨げる)何がしかの事柄がなかったか思いを巡らせるためなのである。」(Edwards, 1736, 51:L.7v.)

1743年7月に害虫によってノーザンプトンの収穫物が食い荒された際に、エドワーズはその原因を貧しい者に喜捨を拒む人々の出し惜しみの心に求めている。

「人々がこの地上での良い物を神にささげることが、作物を破壊する審きを除かれ、十分な作物の実りが与えられる確かな道なのである。」(Edwards, 1743年, 61:L.1v.)

さらに軍事的な遠征が行われる際も、断食日の祈祷において、この契約に基づいた神の守りと導きが語りかけられた。王国の基盤が揺らぎ、国家が転覆する時にも、神に選ばれた契約の民には揺るがない神の守りと支えが約束されている。「大いなる動揺や災いの時にも、神はその僕たちが守られるように必ずや彼らを支え、顧みられる」(Edwards, 1741, 22:346)

同様に1745年4月の断食祈祷日に、エドワーズはフランス軍の軍事的要衝であったケープ・ブレトン島(Cape Breton)のルイスブルグ(Louisburg)に対して行われようとしていた軍事的遠征の成功を祈る説教を行っている。

「この地上における祝福は、この世界における神の教会を保持する約束を含意している。戦争において特に神の教会は危機にさらされる。サタンは戦争によって教会をつぶそうとたくらむのである。それゆえにこそ神の民を守るために多くの約束が結ばれているのである」。(Edwards, 1745, 25:136)

これらの説教に見られる神学的レトリックの背後にあるのは、アメリカが旧約聖書における神の民イスラエルと同じく、神によって選ばれた契約の民であるという理解である。そしてそのような選ばれた民(chosen people)であるがゆえに、ニューイングランドの民は神との間に交わした契約に信実を尽くすことを求められるのであり、そこからさまよい出た時には悔い改めて立ち帰ることが、その健やかな歩みのための鍵となるのである。⁷ 最初の世代のピューリタン、ウィンスロップの説教になぞらえつつ、エドワーズは語る。

「我々は丘の上の町である。我々は高邁な信仰の告白に拠って立っているものであり、全世界の目は重大な関心をもって我々に向けられているのだ。

もし我々がすでに得ていると思われるものを失い、すでに到達したと思われるところからわき道に逸れていき、ついには他の民と何ら変わるところのない民であることが暴露されることになるならば、我々が受けるべき報いとしての罰はそれだけ重いものとなるだろう。どの個人であれ、民全体であれ、その中に認められる悪しき面は、それと正反対の信仰告白や外見との落差が大きいだけに、ますます彼らにとっての恥として世界の民から見なされることになるだろう。」(Edwards, 1738, 19:767)

先代のピューリタンたちと同じく、エドワーズもまた、契約神学者として、神の民としてのニューイングランドの民の神学的アイデンティティー形成と契約理解に基づくその民への牧会的配慮に生きたのである。

この目的に資する意味でエドワーズが行ったのが、旧約聖書の時代に範を取る契約更新の儀式であった。1742年3月に、エドワーズは自らが起草した教会契約を、集まった14歳以上の教会員に同意することを求めている。「断食と祈祷の日に、礼拝堂に集まった教会員は皆神の御前に献身し、立ち上がり、厳粛な思いで神への誓約として契約への同意を表明した」(Edwards, 1742, 16:121.)。旧約聖書に範を取るこの契約更新の儀式が、イスラエル共同体においては悔い改めと神の民としての結束を強め、神に向かって軌道修正をし、思いを新たにして再出発するという機能を果たしたように、エドワーズはこの18世紀ニューイングランドにおける契約更新の儀式が、同じ役割を担うことを期待したのである。

その背景には、初代ピューリタンがニューイングランドに入植して以来、第2・第3世代を経るに従い、当初の信仰的熱意が失われ、回心経験を持たず、したがってその体験を証しすることができない世代が生まれ、教会員としての陪餐資格を与えることができるか否かが問題となった出来事がある。若い世代の中には安息日順守をせず、仲間であつむ夜歩き (nightwalking)、婚前交渉や結婚前の妊娠、年長者に対する反抗的態度が目立ち、エドワーズは初代ピューリタンが大事にした家庭での信仰教育がそれまでのように機能せず、社会

が信仰的危機に瀕しているとの危機感を深くしていた (Marsden, 2003, 122; 126-27; 130-31)。⁸

その一方で、第1世代のニューイングランドへ入植したピューリタンたちのような信仰的熱意を受け継がず、明確な回心体験を証しすることができない次世代について、彼らの子どもたちに洗礼を授けることができるか、また教会での聖餐に与えることが認められるかどうかが議論となった。この問題について1662年に地域シノッドは決議を行い、基本的な信仰理解を持ち、その教会生活が品行方正なものであるならば、その子弟に幼児洗礼を授けることが認められていた (Walker, 1893, 328; Stout, 1986, 58-59; Holifield, 2003, 53-54)。この「半途契約」(Half-Way Covenant)と呼ばれる措置は、「新しいイスラエル」をアメリカに建設するというピューリタンのプログラムが、第2・第3世代へと当初のヴィジョンのまま継承されていくことが困難と判断される中で (Beeke and Jones, 2012, 782-783)、その教会員規定に修正を加えつつも、教会員の枠組みと国家成員の枠組みとがほぼ一致するキリスト教共同体建設という基本理念を維持しようとする試みであった。⁹

エドワーズが初め副牧師として仕えていたノーザンプトン教会で、主任牧師であり義理の祖父でもあったソロモン・ストッダード (Solomon Stoddard) は、さらに踏み込んで回心経験のない教会員が聖餐に与えることをも認めるようになる。このストッダード方式について、エドワーズはストッダードの死後に疑義を呈するようになり、聖餐の陪餐資格を巡る教会との論争 (communion controversy) に入っていくこととなる。もちろん、この地上での歩みにおいて、誰が救いへと定められている「選ばれた者」(elect)であり、誰がそうでないかを明確に判別することはできない。エドワーズもそのことは十分に認識していた。しかしその中でなお、ある程度の確度をもって誰が聖餐に与えるにふさわしい「恵みの契約」(covenant of grace)の成員であるかを教会として判別することは可能であるとエドワーズは考えた。彼が具体的に求めたことは心からの信仰の告白であり、それをもって陪餐にふさわしい選ばれし者の外的しるしと見なすということであった (Edwards, 1742, 22:516; Marsden, 2003, 352)。しかしエ

ドワーズが教会員に求めたこの程度の陪餐資格としての回心と再生の証明も、変容しつつあったニューイングランド社会の教会には受け入れられず、この陪餐資格を巡る論争は最終的に教会がエドワーズの牧師職を解任するまでに至ることとなる。

時代の流れに抗してまでもエドワーズがこの陪餐資格問題に拘ったのは、やはりそこに神との契約関係に信実を尽くすという神学的・牧会的課題があったからであった。教会の礼拝における聖餐そのものが、神との契約更新式であったのである(Marsden, 2003, 297)。エドワーズは説教でこう述べる、「契約を神との間に結んでいると公に言いながら、それに全く反するような生き方、福音に反し、キリストへの聖なる信仰に反する生き方の中に身を置いていることは何とおぞましい冒瀆であろうか!」(Edwards, 1731, 17:271.)

エドワーズの伝記を書いたジョージ・マーズデン(George Marsden)が指摘しているように、ソロモン・ストッダードは国家の領域と教会の領域とが基本的に重なり合う、国家教会型モデルを志向し、国家の成員はすべて教会員であることを前提とする外的契約の枠組みの中で、真実の回心と再生を経た救われた民が少しでも増えていくことを目指した。この古代イスラエルに範を取る旧約的モデルに対して、エドワーズはこの世から選び分かれた教会の特殊性と回心と再生を経て救われた少数者からなる契約・召命共同体という新約聖書的モチーフを重視したのである(Marsden, 2003, 351)。エドワーズの神学的・牧会的苦闘は、この新約聖書の召命共同体としての教会の特質を重視しつつ、できる限りこの特質をニューイングランドという社会全体の特質としてもなお維持していくことがいかにすれば可能であるのか、という問いを巡るものであった。言い換えれば、救われた者をその成員とする内的契約と、救われた者と滅びに至る者とが混在しているが外的契約という建前の中で一応は社会の全員が教会員としても所属しているという区別を、エドワーズは許容できず、この二つは一致していなければならないと信じ、このディレンマの解決のために自らの牧師職を賭してまでも苦闘したのであった。そしてそのための神学的・牧会的武器として機能したのが

アメリカ的慨嘆歌としての説教修辞であったのである。

Ⅳ 慨嘆歌の功罪

以上において考察したように、アメリカ的慨嘆歌はニューイングランド社会の中で、社会倫理の契約的基盤として機能し、国家契約との関わりにおいて、ニューイングランドの民をあるべき倫理へと引き戻し、軌道修正させる上で重要な役割を果たしてきた。そしてこの伝統は、奴隷解放を巡る問題に直面した南北戦争前後のアメリカにおいても、ネオコンと呼ばれるキリスト教右派のアピールにおいても、なおその底流に流れている地下水脈なのである(Murphy, 2008, 44-106)。

もちろん現代アメリカにおいてはもはや国家契約が前提としているような教会員と国家成員が一致するようなキリスト教社会は想定されえない。そこからはるかに遠く隔たった多元主義社会へと変容している。その意味ではピューリタンが望み、入植した地において維持しようとした国家契約の理念は崩壊してしまっている。それでもなお、ベラーが指摘するように、国家契約やそれに基づくアメリカ的慨嘆歌のモチーフは「市民宗教」化し、社会意識の中になお根づいているのである。「市民宗教」(civil religion)とベラーが呼ぶのは、人々がその「歴史経験を超越的リアリティーの光の下で解釈」しようとする、社会の中に息づく宗教的次元のことである(Bellah, 1975, 3)。

もはや実定宗教としてのキリスト教をも越えた社会意識に根を下ろした伝統として、「アメリカ的慨嘆歌」は、折々にアメリカ社会に表出するレトリックの中に息づいているのである。言わば、キリスト教のピューリタニズムに端を発した「アメリカ的慨嘆歌」の伝統は、今や世俗化して社会一般に拡散し、誰もが無意識のうちに利用する政治社会的レトリックへと変容しているのである。

「アメリカ的慨嘆歌」の伝統は、個々のケースにおいてどれだけの効果をもたらしたかは別として、岐路に立つアメリカ社会において、アメリカ社会の精神的・理念的次元に息づく契約神学的基盤に訴えることによって、社会の軌道修正や霊的刷新の原動力となってきたのである。その一方で、具体的な個々の事件や災害を、国民に悔い改

めを迫る神罰であると説明する慨嘆歌の伝統は、特に現代においては社会の拒否反応を引き起こすことも少なくない。テロリズムや自然災害を安易な仕方での審判と結びつけて悔い改めを迫るレトリックは、場合によっては犠牲者や遺族の悲嘆に追い打ちをかけるような牧会的配慮を欠いた無思慮な修辞ともなりかねない。また安易に敵を同定し、攻撃を正当化する分断の道具と墮する危険性もある。「アメリカ的慨嘆歌」の伝統をどのように現代において表現にもたすかという課題には、アメリカ社会、就中アメリカのキリスト教の注意深い自己吟味が必要であろう。

V 日本における慨嘆歌の意味

日本社会においては、いまだかつて、アメリカ・ピューリタニズムが最初に前提としていたような、キリスト教的理念に基づいた国家建設といったヴィジョンや国家契約という社会の契約論的基盤が存在したことがない。日本社会にはそもそも国家契約が前提としているような社会の契約論的基盤が存在しないのである。国家契約はキリスト教社会の産物なのである。そもそも日本社会において、教会員であることと国家の成員であることが一致するようなキリスト教的な社会や国家が存在したことはなかった。むしろそれに近い役割を果たしたことがあったのは仏教の檀家制や神道の氏子にあたるものであり、それと結びついた地縁・血縁的結合体としてのムラ社会であっただろう。そこには神的超越との契約論的人格関係は欠落していた。

それゆえに日本社会における教会の状態は、先のストッダードの旧約的神政政治的国家モデルとエドワーズが重心を置こうとした新約的召命共同体型モデルとの関連で言えば、エドワーズが志向した回心と再生を経た神の聖徒らによって構成される契約共同体に近い。

デイヴィッド・マクロー (David McCullough) は、アメリカ的慨嘆歌の伝統を批判的に検討する中で、多元化するアメリカ社会においてキリスト教会の声がますます社会の片隅へ押しやられていく今のような時こそ、教会がいよいよ神との契約に忠実である時なのかもしれない、と指摘している。¹⁰ アメリカの教会は契約に忠実であろうとす

るために、社会における影響力を保持しようともがいったり、特定の時代を神聖視したりする必要はなく、置かれた時代状況の中で神の国の到来の約束とその勝利に信頼し、御国の福音を宣べ伝えることに専心するべきだというのである。

その意味では日本の教会はその初めから社会の周縁に押しやられた、マクローが指摘するような状況の中に置かれている、「荒れ野に呼ばれる者の声」である。日本には国家契約が存在したことはなく、あるのは教会契約であり、その背後にある「恵みの契約」のみなのである。初めから多元社会であった日本において、神的契約を担ったのはキリスト教会のみであった。それゆえ日本社会を契約論的基盤から分析し、論じる営みを本来的に担うことができるのも契約共同体としてのキリスト教会のみである。そしてこの契約論的視座を発信できるのもキリスト教会であり、点から線、線から面へとこの契約共同体のフロントラインを前進させる伝道の働きを担うのも契約共同体としての教会のみなのである。

VI 終わりに

本稿において私はピューリタンに由来するアメリカにおける慨嘆歌の伝統を特定し、その具体的ケースとしてジョナサン・エドワーズの神学と牧会において表出した慨嘆歌の伝統を考察した。その上で、現代におけるこの伝統の功罪について瞥見し、日本の社会とキリスト教会における意味について付言した。

アメリカ的慨嘆歌の伝統は、現代におけるその表現においては注意が必要であるとしても、契約の民としてのピューリタンたちが自分たちの歩みを自己吟味する中で生まれてきた神学的伝統である。そしてその遺産は世俗化した形ではあっても、アメリカ社会の中に市民宗教化して現存している。その意味で、この慨嘆歌の伝統は、アメリカのキリスト教を理解する上で考慮すべき重要な要素の一つであることは確かである。

ただし契約神学の地下水脈がなお息づいているアメリカ社会と初めからこの共通基盤を持たない多元的社会である日本とでは背景が異なるのであり、日本における慨嘆歌とそれに基づく公共神学的言説は社会や国家ではなく、教会という共同体

においてこそ継承されねばならない。そしてそれこそが元来の慨嘆歌の共同体的発信源なのである。

※聖書からの引用はすべて新共同訳に拠っている。

〈参考文献〉

- Beeke, Joel R. and Mark Jones. *A Puritan Theology : Doctrine for Life*. Grand Rapids, MI : Reformation Heritage Books, 2012.
- Bellah, Robert N. *The Broken Covenant : American Civil Religion in Time of Trial*. Second edition. Chicago : University of Chicago Press, 1975.
- Bercovitch, Sacvan. *The American Jeremiad*. Madison, WI : The University of Wisconsin Press, 1978.
- Cherry, Conrad. “The Puritan Notion of the Covenant in Jonathan Edwards’ Doctrine of Faith.” *Church History* 34, no. 3 (1965) : 328–41.
- Edwards, Jonathan. “Impending Judgments Averted only by Reformation (1727).” *Sermons and Discourses, 1723–1729*, 216–28. Edited by Kenneth P. Minkema. Volume 14 of *The Works of Jonathan Edwards*. New Haven : Yale University Press, 1997.
- _____. “Self-Examination and the Lord’s Supper (March 21, 1731).” *Sermons and Discourses, 1730–1733*, 263–73. Edited by Mark Valeri. Volume 17 of *The Works of Jonathan Edwards*. New Haven : Yale University Press, 1999.
- _____. “400. Sermon on Deut. 28 : 12 (Jul. 1736)” *Sermons, Series II*, 1736. Edited by Jonathan Edwards Center. Volume 51 of *The Works of Jonathan Edwards Online*. Jonathan Edwards Center : Yale University, 2008. ([http : // edwards.yale.edu/research/browse](http://edwards.yale.edu/research/browse))
- _____. “423. Sermon on II Chr. 23 : 16 (Mar. 1737).” *The Works of Jonathan Edwards*. Volume 52 of *The Works of Jonathan Edwards Online*. Jonathan Edwards Center : Yale University, 2008. ([http : // edwards.yale.edu/research/browse](http://edwards.yale.edu/research/browse))
- _____. “Indicting God (1738).” *Sermons and Discourses, 1734–1738*, 749–68. Edited by M. X. Lesser. Volume 19 of *The Works of Jonathan Edwards*. New Haven : Yale University Press, 2001.
- _____. “God’s Care for His Servants (1741).” *Sermons and Discourses, 1739–1742*, 344–64. Edited by Harry S. Stout, et al. Volume 22 of *The Works of Jonathan Edwards*. New Haven : Yale University Press, 2003.
- _____. “Renewing Our Covenant (1742).” *Sermons and Discourses, 1739–1742*, 509–13. Edited by Harry S. Stout, et al. Volume 22 of *The Works of Jonathan Edwards*. New Haven : Yale University Press, 2003.
- _____. “To the Reverend Thomas Prince (1742),” 116–27. *Letters and Personal Writings*. Edited by Georges S. Claghorn. Volume 16 of *The Works of Jonathan Edwards*. New Haven : Yale University Press, 1998.
- _____. “708. Sermon on Mal. 3 : 10–11 (Jul. 1743)” *Sermons, Series II*, 1743. Edited by Jonathan Edwards Center. Volume 61 of *The Works of Jonathan Edwards Online*. Jonathan Edwards Center, Yale University, 2008. ([http : // edwards.yale.edu/research/browse](http://edwards.yale.edu/research/browse))
- _____. “Duties of Christians (1745).” *Sermons and Discourses, 1743–1758*, 128–142. Edited by Wilson H. Kimnach. Volume 25 of *The Works of Jonathan Edwards*. New Haven : Yale University Press, 2006.
- Holifield, Brooks, E. *Theology on America : Christian Thought from the Age of the ‘Puritans to the Civil War*. New Haven : Yale University Press, 2003.
- 木下尚一訳『ピューリタニズム』アメリカ古典文庫15研究社、1976年。
- Marsden, George, M. *Jonathan Edwards : A Life*. New Haven : Yale University Press, 2003.
- McDermott, Gerald, R. *One Holy and Happy Society : The Public Theology of Jonathan Edwards*. University Park, PA : The Pennsylvania University Press, 1992.
- Miller, Perry. *The New England Mind : From Colony to Province*. Cambridge, MA : Harvard University Press, 1953.
- _____. *Jonathan Edwards*. Amherst, MA : The University of Massachusetts Press, 1981.
- Murphy, Andrew R. *Prodigal Nation : Moral Decline and Divine Punishment from New England to 9/11*. New York : Oxford University Press, 2008.
- 難波雅紀「『見える聖徒』のレトリック—Shepard’s Ten VirginsのJeremiad」『尚美学園短期大学研究紀要』9号(1995年) : 117–131頁。
- 中嶋啓雄「歴史的視座から見たアメリカの安全保障文化—ユダヤ＝キリスト教的伝統・共和主義・自由主義」『国際政治』167号(2012年) : 14–26頁。
- Stout, Harry S. *The New England Soul : Preaching and*

Religious Culture in Colonial New England. New York : Oxford University Press, 1986.

———. “The Puritans and Edwards,” *Jonathan Edwards and the American Experience*. Edited by Nathan O. Hatch and Harry S. Stout, 142–159. New York : Oxford University Press, 1988.

Walker, Williston. *The Creeds and Platforms of Congregationalism*. New York : Charles Scribner’s Sons, 1893.

〈注〉

¹ Eric Clary, “Disasters and Divine Retribution : Beware the Rush to Judgment (October, 16, 2017).” (<http://intersectproject.org/faith-and-culture/disasters-divine-retribution-rush-judgment/>) (accessed on October 8, 2018)

² Andrew Kaczynski and Nathan McDermott, “Senate candidate Roy Moore this year suggested 9/11 might have been punishment for US turning away from God (September 14, 2017).” (<https://edition.cnn.com/2017/09/14/politics/kfile-roy-moore-9-11/index.html>) (accessed on October 8, 2018)

³ 以下も参照のこと。大西直樹『ピルグリム・ファーズという神話』(講談社、1998年)。

⁴ ミッチェルとダンフォースの文献は木下『ピューリタニズム』に訳出されている。

⁵ 本節におけるジョナサン・エドワーズの国家契約論について詳しくは以下の拙論の第6章を参照のこと。Reita Yazawa, *Covenant of Redemption in the Trinitarian Theology of Jonathan Edwards : The Nexus between the Immanent Trinity and the Economic Trinity* (Eugene, OR : Pickwick, forthcoming).

⁶ 雷や彗星、地震といった自然現象の背後に超越的存在の働きを認めた当時の一般的な世界観について以下を参照。David D. Hall, *Worlds of Wonder, Days of Judgment : Popular Religious Belief in Early New England* (Cambridge, MA : Harvard University Press, 1989).

⁷ この点についてさらに詳しくは以下を参照のこと。McDermott, *One Holy and Happy Society*, 11–36 (“God’s Manner with a Covenant People : The National Covenant”).

⁸ 以下も参照のこと。Thomas H. Johnson, “Jonathan Edwards and the ‘Young Folks’ Bible,” *The New England Quarterly* 5, no. 1 (1932) : 37–54.

⁹ 以下も参照。大西直樹『ニューイングランドの宗教と

社会』(彩流社、1997年)。

¹⁰ Matt McCullough, “The American Jeremiad : A Bit of Perspective on the Rhetoric of Decline (October 23, 2014)” <https://www.9marks.org/article/the-american-jeremiad-a-bit-of-perspective-on-the-rhetoric-of-decline/> (accessed on October 8, 2018)

